続猿蓑

911.3
ゾ
上

續猿蓑集巻之上

八九間空て雨降る柳かな　芭蕉

春のからすの畠ほる声　沾圃

初荷とる馬子もこのみの羽織きて　馬莧

内はどさつく晩のふるまひ　里圃

きのふから日和かたまる月の色　沾圃

狗脊（せんまい）かれて肌寒うなる　芭蕉

晴庭住 井上氏

渋柿もことしは風に吹れけり　里
孫が跡とる祖父の借銭　覓
脇指に替てほしがる旅刀　蕉
煤をしまへばはや餅の段　沾
約束の小鳥一さげ売にきて　覓
十里ばかりの余所へ出かゝる　里
笹の葉に小路埋ておもしろや　沾
何の隔もつなき門の書つけ　蕉
竹之ゝ縁先は清やき埋場とも　里
やつとせ出ても京の留守つれ　覓
名所におかしき花のしるべてあひて　蕉
見ぐるしうなふ物のたべ口　沾
碁所も来ぬか川流れぬ縁をまつ　覓
伊勢の下向に庵つゞきと逢　里
長孫に小挙札押ろそかにしと　沾
くつろぎの宮の目付るあさやなる　蕉

禅寺に一日あそふ砂の上　里

槻(ケヤキ)の角乃すてぬ貫穴　莧

濱出しの牛に俵をこぼすや　蕉

なれぬ娵にもらす内證　沾

月待に傍輩衆のうちそろひ　莧

籬の菊の名乗さま〳〵　里

せまれて并て西家も橋もさびくのあり　沾

伴僧をしる驚乃わ記　蕉

削やうに長刀坂の冬の風　里

わぬさに置のとなれるあら　莧

つい立て聞に鐘せてる車とあやさ　蕉

ふ川と火入に柳もれ　蕉　沾

花さきや錆敷まきのうきくされて　莧

澁柿しら○なるかぬふのあり　里

雀の字や揃ふて渡る鳥の声　　馬莧
てりむくりの岸の椛もしるき月　　沾圃
立家を買てはいれる秋暮て　　里圃
娘川ノしかるものゝ如く月酒　　莧
霜こまかなる甚喰ふ子とも五六人　　沾
遠きおいてふの洗足　　里

悔しきもののふの一歩のんでとなり　莧
請状よんでまするわりまする　沾
おもきさ浅葉おのこと気ざらし　里
急ぬり出ぬる国方乃客　莧
何事もなくてめでたき絶刻迎　沾
風よふかすかるゝ猫の穂の月　里
虚所　秋の往ゝ旅に往くて　莧
祓洗の恋まと女房呼ぶ　沾

明まうす　伊勢の辛洲(カラス)のゆゝし籠り　里
世冥をまとゝ紀わかぬ　一法　莧
借来もまかりて宝き蘆盃　沾
ま長静なる峠乃　隣纑(カセ)　里
鶯の浜あき雪は掃除し　莧
まゝぬ合点てかくて居る　沾
年(ツル)つしに思ふら絶えと中西く　里
之崎誘契の暮のことさむや　莧

汁の実にこまる茄子のむき盡て
あしらひ妻をよし川刈てとる
にしに寺の核圖をかゝれし
扇のおもて乃やぶるを惜しき
綴ありてよごれし畝小高
早竹して庵より料理くふ
肌入て秋にかしくり菊の月
影よこたはるく芭蕉の露

沾　里　沾　莧　里　沾　里

け盛を實の母死あと向て
丸付て折り羽乃衣閉
蚕のまぬれさ雛子附のとらひ和
修て氣味よき松苗の風
花のうけ營ぶ立雛子の鮮くり
あく国の土のかゝくうけるふ

莧　沾　里　莧　沾　里

はゝき立鷹引すゆる山嵐かな　里圃
冬のまさ木の霜ながら抜　沾圃
大根のそだゝぬ土にふしくれて　芭蕉
上下ともに朝茶のむ秋　馬莧
町切に月見の頭の集めけり　沾
荷がちら〳〵と通る馬次　里

知恩院の替りの噂極りて　　莧
はくしきはも楓わかやく　　沾
姐の鐘にあきへうけならし　　里
目利て宮盤よんさしかり　　沾
状箱を駿河の飛脚請とりて　　莧
まつさき川の走かし毎日の紀　　里
草の葉ふよくあらく紀みの泡ちきり　　莧
伊鶴〃魚つふ綿とりの菊　　沾

うき猿を駒とつれ立泊りゐる　　里
色眼ゐうり眠きつろゑくく　　莧
米舟の花の中より漕つゝきて　　沾
枳の衛へ門をきらてけり　　里
百姓になりて世の中も無宗　　莧
こおのをき膳にあくめ慰業　　沾
貴物の法持法とおろし　　里
悩みのあつきそくめともきね　　莧

砧を言ふ蘚の中乃絡緯(ギス)のおとろ
茶をき人々いひあらそふ
火燵の火いけて携手び志所やゝと
一石ぬらし雅(カラス)乃米
折しも寒月の越るを寝れ
御ダ膳に加減乃ちゝふ和さ
有髪なもしゝめとも汲てゝゝ
おもひのまゝにお振て在信

沾　里　芫　里　沾

手拂ふ蝶をやりて焼のさゝ
ゑらす家の花をとらて仕事
花のあと躑躅のさかりけれろい
寺のひけゝろ山際の　まち
冬よりも近くなりしほり心の鶴
一画伴てあらくなる凧

芫　里　沾　芫　里

猿蓑にもれたる霜の松露哉　沾圃

日は寒けれど静なる岡　芭蕉

水かるゝ池の中より道ありて　支考

篠竹まじる柴をいたゞく　惟然

鶏があがるとやがて暮の月　芭蕉

通りのなさに見世たつる秋　支考

まなこよい一荷で来る舘の魚　然
丞相の瓣をたゝしまきり　蕉
簾ゝ来て西川ども七尺に劔　考
中国よりの状の荒々し　然
雑はの月出しやる揺籃に　蕉
一言羽織り失て尋ぬる　考
ききん汁なまぬるの此の櫃　然
山に門あるみさゝの月　蕉

神ありし畑の人のつけまゐる　考
子孫光る涙乃小鍋　然
見て居る花に卉花の咲かぬ　蕉
荷扱ひとりはいとく水きは　考
ちら風のふき水北にかり　然
わらぢ手に脈をちるゝ渡　蕉
旅中の内得たとなく　考
喧嘩乃さるとも世にさとせしめぬ　然

大井川ならは二ヶ五番の渡　蕉
雪かさおとし中のとをる　考
来る程の乗掛も当家流　然
奥の世並は近年の作　蕉
酒よりも肴のやすき月見して　考
赤鶏頭を庭の正面　然
定らぬ娘のこゝろ取しづめ　蕉
寝汗のとまる今朝がたの夢　考

鳥籠をはらりと掛る松の風　然
大工づかひの奥に聞ゆる　蕉
米搗もけふはよしとて帰る　考
しゝもて市の中を押あふ　蕉
けあかり湯生え花のけもなくて　然
鴨の油のまだぬけぬ春　考

今宵賦

野盤子 支考

今宵ハ六月十六日のそらミにかよひ月ハ東方の乱山にかゝげて衣裳の湖水の秋を物くるはされむとて宵の雨そゝぎし後より尊卑の席をくるくるもちさたハりし敵て ゆゝしき次人をこゝしるあさくしてわずか里ひらき我おもふ事を語りしかくりなき人さへさうる人をも真にもたし免ひかれあへて雑事

なからふに糸のあやくろしろとかゝりたる帷庫
ののふにまくらしにの亀子をならしむらさき
之ぬをつゝるる阿度か深川のいかなる四
条の春秋をうきよにてくらしはいつの月
さつきのあはいを待りて伊賀のうちにて
父母の古墳(ふん)をとふらひ洛の嵯峨山に
籠居して嵯峨祇園の涼ミにもまさるよ
り夏かそてやけらよ秋をまたれしさまよ

世ふにまたか御身の納涼もいかはれしく
とてまこと三四里の馬を壊て家に草鞋の
履をやうすかはにかけ宿の蓑笠をなかし
として備あり俗なり俗にして備に似たる
ものはいつの交のはいにのさ砂川の
岸に小松をさしとなうらし涼しく朝は
すゞしく夜の川味なくして人にあらで
ちゝ半年なうしかりし人としのさし
おきてまさるこにおこれなくおのつからよ

ろくろ色人の顔よろしておわかへ次鶏
啼て月もかゝみはかやましてゑみかる
此夜何度もたゝせの方へと心ざしや
されし支考も此路の方に行ところ
出て附句の比をさきえとなともおもひなり
まかりしを潮のよるのやうてさゝうしに色
わかれて以何か此夜なひにおろしかるまさて
のと宵を暮のことく明年はいやさこさゝ
ら唄くるの真宴何そ何かくしさ御あらん

ころは酔て猶あるじのあつきを罍盃の杯
あかつきのまさんとたゝかれおもひぬ

草の色や明て明しつあ　芭蕉
露をさらつて蓮の根出　曲翠
鶯はいつその頭にさし入て　洒堂
たゝき華鏡に文坂也　惟然
月影の雪もちらある雲の色　支考
まかりて隣まゐる駕籠かな　芭蕉

猪を狩場の外へ追かへし　翠
山ゝらに名をきかて初汐　言
飯櫃なる面桶にはさむ火打袋　然
鳶て上まをさゝる照降　考
おれが事哥に讀るゝ橋の番　蕉
持佛のかほに夕日さし込　翠
平畦に菜を蒔立したばこ跡　考
秋風わたる門の居風呂　然

馬引て賑ひ初る月の秋　言
尾張てつきしものゝ名よばる　蕉
餅搗のこゝし花に招かれて　翠
ね月とのく襟もよごさず　言
春風に普請の作もいそぐや　然
薮から村へぬけるうしろさ　考
喰つきね響も當もはきいて　蕉
何その酎も白状になる　翠

笹ほとゝ様に付ところさゝ蛤　高
蔵こいちるか月取らく来　蕉
れ有やゝ瑞光よ之川矢木の町　考
修の日和よ雪乃乱き　然
呑ちゝろ手跡を杯酒の引はな　翠
見かんのうき二冊へあらくろ　高
封付し文龍来ち月の暑　蕉
そろしありゝく盃の上藤花　考

虫籠つる四条の角の河原町　然
えり渡きあくろ表一国　翠
そのおまよ院を見かく際様の上　高
大やな清のとんよ守ちろ　然
尽ちる花のも飛柳しおきて　考
膝ゝけつゝしてる桃の下　嵩

暁人雨書

昭和學園短大圖書
第　號
受入
昭和36.3.14